

長野県松本市

KOMATSUSITA

小松下遺跡

—第1次発掘調査報告書—

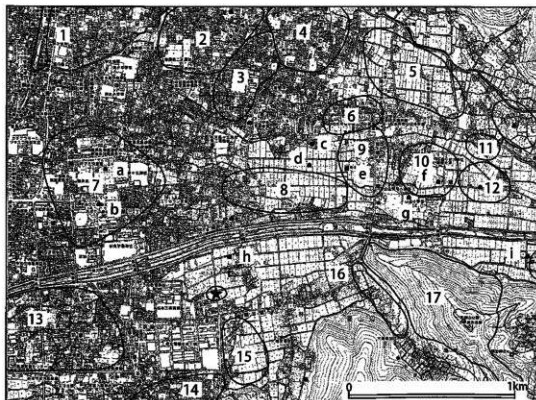


2010. 3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成19年4月9日～19年6月7日に実施された、松本市筑摩4丁目4406番2に所在する小松下遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は市道3171号線道路改良工事に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行なった。
- 3 本書の執筆は、Ⅰ：事務局、Ⅱ：吉井 理、Ⅲ1：吉井、Ⅲ2：内田陽一郎・吉井、Ⅲ3(1)直井雅尚、(2)吉井、(3)内田、Ⅳ：三村竜一が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。
 遺物の洗浄・注記：百瀬二三子 土器接合：白鳥文彦、前沢里江
 土器実測・トレス：竹内直美、竹平悦子、中澤温子、八坂千佳 金属器拓本：洞澤文江
 石器実測・トレス：内田陽一郎 遺構図調整：荒井留美子
 遺物写真：宮嶋洋一 総括・編集：吉井 理
- 5 本書で用いた略称は下記のとおりである。
 第●号住居址⇒●住、第●号土坑⇒●土、堅穴状遺構⇒●堅、第●号溝状遺構⇒●溝、サブトレンチ⇒ST●
- 6 土器の実測図において断面図の白抜は土師器・黒色土器A・B、スミ塗は須恵器・灰軸陶器を表している。
- 7 遺構・遺物の記述で用いた古代・中世土器の種別・器種・時期区分等は、次の文献に拠っている。〔町長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4-松本市内その1- 総論編』〕
- 8 本調査で得られた出土資料及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市大字中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。



- 1 女鳥羽川遺跡
 - 2 宮北遺跡
 - 3 下原遺跡
 - 4 新井遺跡
 - 5 堀の内遺跡
 - 6 元川寺遺跡
 - 7 県町遺跡
 - 8 北小松遺跡
 - 9 針塚遺跡
 - 10 薄町遺跡
 - 11 鎌田遺跡
 - 12 石上遺跡
 - 13 筑摩遺跡
 - 14 神田遺跡
 - 15 千鹿頭北遺跡
 - 16 林山園遺跡
 - 17 林城址
 - a 泉塚2号墳
 - b 泉塚1号墳
 - c 大塚2号墳
 - d 大塚1号墳
 - e 針塚古墳
 - f 古宮古墳
 - g 里山辺遺塚古墳
 - h 市上古墳
 - i 南方古墳
- ★：調査地
 ●：古墳

第1図 調査地及び周辺遺跡

目次

I 調査の経緯	
1. 調査の経過	3
2. 調査体制	3
II 遺跡の位置と環境	
1. 地形・地質	4
2. 歴史	4
III 調査結果	
1. 調査の概要	7
2. 遺構	7
3. 遺物	15
IV 調査の総括	22

I 調査の経緯

1 調査の経過

今回の調査地点は松本市筑摩4丁目4406番2にあたる。当所に市道3171号線（市道出川浅間線）道路改良工事が計画されたため、松本市教育委員会文化財課は平成19年3月27日付けで土地所有者から承諾書を徴し、3月27・28日に試掘確認調査を実施した。その結果、一部に奈良～平安時代の遺構及び遺物が残存しており、遺跡であることが判明したが、一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されていなかったため、急きょ新発見の遺跡として登録し、小字名から小松下遺跡と命名した。

開発原因者である松本市建設部建設課との2者協議の結果、工事によって当該文化財が破壊されるので保護を図ることになり、保護方法は緊急発掘の記録保存によることとなった。松本市教育委員会文化財課は文化財保護法99条に基づく発掘調査を同年4月9日から開始し、同年6月7日を以て終了した。

同日、埋蔵物発見届を松本警察署長宛に提出するとともに、6月8日に長野県教育委員会へ発掘調査終了報告書を提出した。同年6月22日付けで長野県教育委員会から埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知が届いた。次いで、平成20年5月21日に長野県教育委員会へ出土文化財の譲与申請を行い、同年5月28日付けで長野県教育委員会教育長より松本市教育委員会教育長宛に譲与の通知があった。

現場測量図と出土品の整理作業は平成20年6月から松本市立考古博物館において実施し、平成22年3月31日に発掘調査報告書（本書）を刊行することで完了した。

2 調査体制

調査団長 伊藤 光(松本市教育委員会教育長)

調査担当 三村竜一(文化財課主任)、内田陽一郎(同嘱託)、吉井 理(同)

調査員 森 義直 三村 肇

協力者 飯田三男、井口方宏、石川一男、小澤清登、折井完次、小岩井洋、清水陽子、古屋美江、
宮澤文雄、渡辺順子

事務局 松本市教育委員会 教育部 文化財課

官島吉秀(課長～平成20年3月)、小穴定利(同平成20年4月～)、横山泰基(同埋蔵文化財担当係長～平成20年3月)、大竹永明(同平成20年4月～)、塩崎裕(同平成20年10月～)、直井雅尚(同主査)、櫻井了(同主事～平成21年3月)、小山高志(同主任平成20年4月～)、橋澤希希(同嘱託)

II 遺跡の位置と環境

1 地形・地質

本遺跡は、松本盆地東端の薄川扇状地上に位置する。調査区は薄川から南に300m離れ、標高620m前後の西に下る緩斜面に立地する。調査以前は水田として利用されていた。

基本層序は第2図で示した。水田耕作に伴う耕作土(表土)は発掘調査前に剥ぎ取られていた。I層は水田造成に伴う造成土と考えられ、部分的に粒径10cm前後の礫を含み、調査区全域で確認された。II層は調査区北東付近を除いて確認でき、南へいくほど層厚が増す。現水田以前の水田層と考えられる。III層は調査区中央から北側付近と一部南側にも途中断絶するが類似するものが確認され、遺構覆土とも類似する。IV層は調査区中央付近に堆積する礫層。V・VII層は、ほぼ調査区全域で確認される砂層で局所的にVI層の礫層を挟む。IV層以下で遺物は確認されていない。

2 歴史

弥生時代 薄川の中・下流域の河岸段丘および扇状地部分に分布しているが、右岸に多い。

左岸 千鹿頭北(中・後期)、**神田**(中期)では土器・石器が出土している。

筑摩・神田地区(筑摩神社付近・松本工業高校敷地・富士電機工場敷地)で中・後期の遺物が採集されている。

右岸 針塚では当地域に弥生文化が波及した頃の、前期末の再葬墓がみつまっている。

果町(中期後半38・後期末4)、**鎌田**(後期後半2)、**堀の内**(後期10)がある。他、**本屋敷**(中期)・**宮北**(後期)から該期の遺物が出土している。

古墳時代 弥生時代と同様の遺跡立地ではあるが、遺跡数は増大する。

左岸 千鹿頭北では前期の住居址7軒、後期の住居址40軒と建物址6棟がみつまっている。他、筑摩・神田地区から後期の遺物が採集されている。

右岸 堀の内(前期17・中期4・後期4)、**鎌田**(中期2)、**果町**(中期末～後期初頭4)がある。なお、堀の内からは前期と推定される方形周溝墓が1基みつまっている。

下原では山辺中学校敷地内の調査(1984～1986)で後期の住居址6軒と建物址1棟が確認されていたが、1992年の調査でさらに該期の住居址13軒と建物址11棟がみつまっている。

古墳 薄川の両岸縁辺部と山麓部の2箇所分布が集中する。

左岸 薄川縁辺部では巾上古墳と南方古墳があり、いずれも主体部を横穴式石室とする後期古墳である。南方古墳からは金銅装束頭大刀、銅碗・承盤、鉄製壺蓋等の特殊な副葬品が出土している。山麓部では御符古墳があり、直刀・剣が出土していることから、中期後半～後期初頭に築造されたと考えられる。

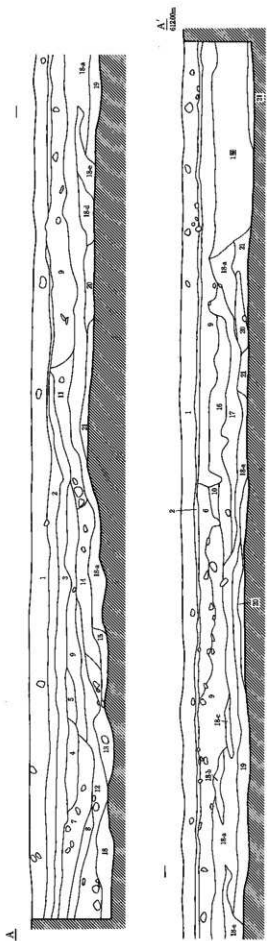
右岸 薄川縁辺部では薄川～荒町にかけて分布する積石塚古墳群がある。針塚古墳は5世紀後半に築造されたもので、壑穴式石室には内向八花文鏡(舶載鏡)が副葬されていた。大塚古墳・古宮古墳は出土遺物から後期古墳と考えられる。また、隣接する石上からは後期古墳の周溝部分が検出されている。山麓部では山辺谷の沢筋毎に数基単位で後期古墳が分布している。いずれも斜面に立地した横穴式石室をもつ小規模墳である。

奈良・平安時代 薄川中流域の両岸で、広範囲にわたって遺跡が分布している

左岸 千鹿頭北(奈良10・平安7)、**林山腰**(平安2)、**神田**(奈良・平安10)がある。この他に筑摩・神田地区周辺からも遺物が出土している。

右岸 堀の内(平安67)・**薄町**(平安10)、**石上**(平安33)、**果町**(奈良～平安94)がある。また、推定信濃国府確認調査(1982～86)によって惣社～大村地区で11軒、下原で2軒の平安時代の住居址が調査されている。

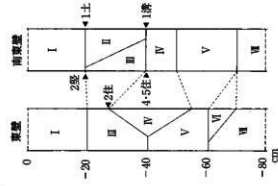
※遺跡名はゴシック(数字)は住居址数



2cm
0

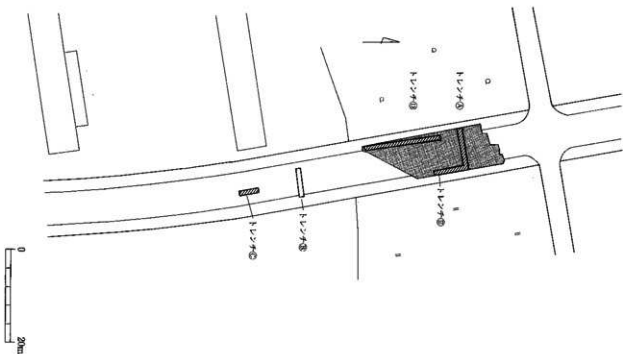
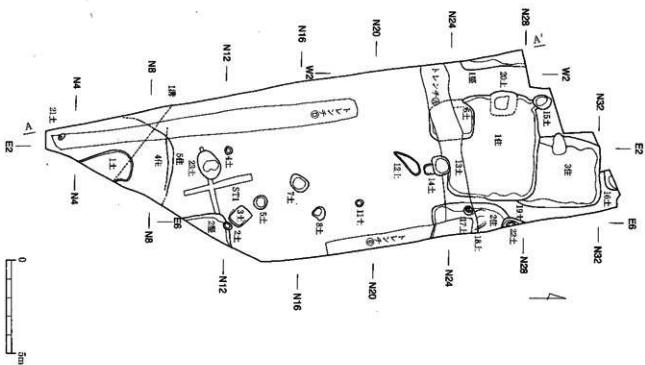
- 1: 暗棕色粘土 (10YR5/1) 細粒土 (基本土層 1)
- 2: 暗褐色土 (10YR5/4) 附泥 暗褐色土粒小・灰褐色土粒小、白色石粒極少量、黄褐色土粒小、白色石粒極少量 (基本土層 2)
- 3: 灰黄褐色土 (10YR5/2) 黄褐色土粒小・灰褐色土粒小・少量
- 4: にこい黄褐色土 (10YR5/4) ϕ ~ 10cm 附中量泥入
- 5: にこい黄褐色土 (10YR5/4) ϕ ~ 2cm 附中量泥入
- 6: 黄褐色土 (10YR5/3) 黄褐色土粒小・少量、 ϕ ~ 15cm 附中量泥入
- 7: 暗褐色土 (10YR5/2) 灰褐色土粒中・黄褐色土粒少量、白色石粒少量、 ϕ 1 ~ 20cm 附泥入
- 8: にこい黄褐色土 (10YR5/4) ϕ ~ 10cm 附中量泥入
- 9: 暗褐色土 (10YR5/2) 黄褐色土粒中・少量、 ϕ ~ 10cm 附中量泥入 (基本土層 3)
- 10: 暗褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土粒少量、白色石粒少量、 ϕ 1 ~ 15cm 附少量泥入
- 11: 暗褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土粒少量、白色石粒少量、 ϕ 1 ~ 15cm 附少量泥入
- 12: 暗褐色砂層 (10YR5/1) 附泥
- 13: 暗褐色砂層 (10YR5/1) ϕ ~ 10cm 附少量泥入
- 14: にこい黄褐色土 (10YR5/3) ϕ 10cm 附泥入 (4粒)
- 15: 暗褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土粒少量、白色石粒少量、 ϕ 1 ~ 15cm 附少量泥入 (基本土層 4)
- 16: 暗褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土粒中・少量、 ϕ 1 ~ 15cm 附少量泥入 (基本土層 5)
- 17: 暗褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土粒中・少量、 ϕ 1 ~ 15cm 附少量泥入 (基本土層 6)
- 18a: にこい黄褐色砂層 (10YR5/4) 暗褐色土粒中・少量、 ϕ 1 ~ 5cm 附少量泥入 (基本土層 7)
- 18b: 暗褐色砂層 (10YR5/4) ϕ 1 ~ 5cm 附少量泥入 (基本土層 8)
- 19: 灰黄褐色砂層 (10YR5/4) 暗褐色土粒小・少量泥入 (基本土層 9)
- 20: 灰黄褐色砂層 (10YR5/4) 暗褐色土粒小・少量泥入 (基本土層 10)
- 21: にこい黄褐色砂層 (10YR5/4) 暗褐色土粒小・少量泥入 (基本土層 11)

東壁・南壁型基本土層断面図



- 土層注記
- I: 暗褐色粘土 (10YR5/1) 灰褐色土が下層に露く帯状またはブロック状に入る。下層露部の幅の影響を受けている。附付土
 - II: 暗褐色粘土 (10YR5/4) 附泥
 - III: 暗褐色土 (10YR5/3) 黄褐色土粒中・少量、 ϕ ~ 10cm 附中量泥入
 - IV: 暗褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土粒小・少量、 ϕ ~ 15cm 附少量泥入
 - V: 暗褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土粒少量、白色石粒少量、 ϕ 1 ~ 15cm 附少量泥入
 - VI: 暗褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土粒少量、白色石粒少量、 ϕ 1 ~ 15cm 附少量泥入
 - VII: 暗褐色砂層 (10YR5/1) 附泥
 - VIII: 暗褐色砂層 (10YR5/1) ϕ ~ 10cm 附少量泥入
 - IX: にこい黄褐色砂層 (10YR5/4) 暗褐色土粒中・少量、 ϕ 1 ~ 5cm 附少量泥入 (基本土層 7)
 - X: 暗褐色砂層 (10YR5/4) ϕ 1 ~ 5cm 附少量泥入 (基本土層 8)
 - XI: 灰黄褐色砂層 (10YR5/4) 暗褐色土粒小・少量泥入 (基本土層 9)
 - XII: 灰黄褐色砂層 (10YR5/4) 暗褐色土粒小・少量泥入 (基本土層 10)
 - XIII: にこい黄褐色砂層 (10YR5/4) 暗褐色土粒小・少量泥入 (基本土層 11)

第2図 調査区西壁土層図・土層柱状図



第3図 遺構配置図・トレンチ位置図

Ⅲ 調査結果

1 調査の概要

今回の調査地点は松本市筑摩4丁目4406番2にあたり、市道3171号線道路改良工事が計画されたため、試掘調査を実施、その結果、一部に奈良～平安時代の遺構及び遺物が残存していることが判明し、発掘調査を実施した。調査地は既知の文化財包蔵地ではなかったため、小字名から小松下遺跡と命名した。

調査方法 発掘調査は大型建設用機械バックホーで表土から遺構検出面直上まで掘り下げを行い、それ以降に人力による調査を行った結果、調査区の主に北側と南側で竪穴住居址や土坑等が検出された。遺構番号は種類毎検出順に付している。土坑については薄川の氾濫時における簡い分けによって土坑状になったと考えられるものを含む可能性がある。また、調査区中央部は一面に礫が検出されたが、一部トレンチ調査を行なったのみに留まっている。

測量方法 平面測量は、調査区南に測量用基準点 X=24851.000、Y=-45370.000（旧平面直角座標第Ⅷ系）を設定し、本報告書ではこの点をNS0、EW0とした。設定した後、基準点から3m毎のグリッドを調査区内に設定した。標高については、調査区南に水準点（BM=612.000m）を設定した。遺構図・出土遺物図の測量は簡易通り方測量で行い、遺構配置図を1/100、土層・遺物出土・完掘図を1/20で作成した。

調査成果 発掘及び整理作業の結果、竪穴住居址5軒（古墳～平安時代）、竪穴状遺構2基、土坑23基、溝状遺構1本の遺構と、古墳～現代にわたる遺物が確認された。その概要は巻末の発掘調査報告書抄録に掲載している。

2 遺構

第1号住居址（第4図） 調査区北に位置する。3住を切り、6・13・15・20土に切られる。規模は5.6×4.1m、壁高30～40cmを測り、隅丸長方形を呈する。覆土は主ににぶい黄褐色砂質土で、床面及び床下も砂が堆積し、顕著な硬面は確認できなかった。本址が掘り込む層は場所により砂・礫層・礫混じりの砂質土と異なっている。一定の堆積を壁としておらず、砂質～砂層部分は傾きが大きく、礫層部分は傾きが少なくなる。

北西隅から石組のカマドが検出され、左軸は若干内傾する格好で据えられていた。また、15土から検出された礫もカマド構築材の可能性があり、本址に伴う土坑とも考えられる。ピットは3基検出されており、ピット1・2は両者とも柱穴ではなく東壁から緩やかに下る不整形なL字状の凹みである。

中央部から北西部にかけて大量の礫が検出された。礫の集中は2箇所に分けられる。1箇所は床に対して垂直に立つ状態で検出され、人為的に置かれたものと考えられる。この集中はカマドのやや南東にあり、平面U字状に礫が並べられている。出土状況から、ピット3の位置はカマドと推測される。調査時には土の判別がつかず、1軒の住居址として記録をしてしまったが、出土遺物の時期差から本址より新しい住居址が1軒あったことが考えられる。本址を切る住居址のプランは不整形なピット1及び2の先端ラインからピット3までの範囲が相当すると推測される。

もう1箇所は中央にあり、錐状の形の石を直に並べ、礫と礫が接している部分もある。この集中は大きさ・形状等の選別がされている可能性が高く、人為的なものと考えられる。

出土している礫は被熱による剥離が認められるものや、煤の付着・赤変が顕著に確認できるものが多い。土器は住居内から散在的に出土しており、主に土師器杯・壺・皿、須恵器壺、黒色土器A・B、灰釉陶器、鉄製品（紡錘車）、緑釉陶器が出土している。2つの住居址の時期は6期と12・13期とに推定される。

第2号住居址（第5図） 調査区中央東に位置する。17・18・19土に切られる。検出規模4.4×1.3m、壁高45cm前後を測り、隅丸方形を呈すると推測される。床面付近も砂質土であり、顕著な硬面は確認できなかった。北部に10～15cm程度の礫は確認できたが、石組のカマドは検出されなかった。

ピットは3基検出されている。内ピット2・3は位置や深さから柱穴の可能性はある。

特に南西部に遺物の集中がみられ、主に土師器小形甕・円筒形土器、須恵器杯・四耳壺、軟質須恵器等が出土している。

本址の時期は7期と推定される。

第3号住居址（第6図）調査区北端に位置する。1住に切られる。規模は4.2×4.0m、壁高40～60cmを測り、隅丸方形を呈する。本址も1・2住同様床面は砂質土で顕著な硬化面が確認できなかった。

カマドは西壁中央に張出しの石組カマドが検出されている。両袖ともに内面と上面に黒煤が確認でき、中央部から炭化物・焼土集中も検出された。構築材の抜き取り痕と考えられる凹みも2箇所検出されている。

ピットは9基検出されている。ピット1・2・3・5は位置深さから壁柱穴と考えられる。中央に位置するピット6はテラスをもつ不整形な穴で一部深く掘り込まれており、本址中央にあった主柱穴痕の可能性がある。ピット4・7・8・9の位置関係は柱穴とも推定できるが、非常に浅いため断定することができない。

遺物出土は住居内に散在的に確認できるが、特に中央からやや西寄りの箇所には礫集中部がみられ、遺物は礫集中部以西に集中して出土している。他に同定不可であったが焼骨片が出土している。

本址の時期は6～7期と推定される。

第4号住居址（第7図）調査区南に位置する。5住を切り、1溝に切られる。溝に大部分を削り取られているため、規模・平面形は不明である。

カマドは石組で北西隅に位置すると推測される。遺存状態は悪く、両袖の礫が数点残存していたのみである。

1溝との切り合い関係もあり、古墳時代と平安時代の遺物が混入している点では氾濫による流れ込みと認識していたが、トレンチ⑤で確認していたカマドとは別のカマドが検出されたことから、平安時代の住居址が推定され、1軒として調査をしていたものを4住と5住とに分け、記録を行なった。遺物は土師器杯・盤、黒色土器A椀・灰釉陶器等が出土している。

本址の時期は14期と推定される。

第5号住居址（第7図）調査区南に位置する。4住、1溝に切られる。4住直下に存在し、溝に床面下まで削り取られているため、規模・平面形は不明である。覆土中には礫が数個みられるほか、炭化材片が数箇所出土している。0.5～1cmほどの炭化物は覆土全体から散在的に検出されている。床面は軟弱で、顕著な硬化面は認められなかった。

カマドは石組で西壁中央に位置すると推測される。袖石の遺存状態は悪いが、炭化物及び甕の破片を伴う焼土塊の堆積が検出された。礫の抜き取り痕と考えられる凹みも2つ検出されている。また、覆土中に被熱による剥離、黒色変化が見られカマド構築材と考えられる砂岩が検出されている。この礫に接するように土器が数点出土している。

ピットは1基検出された。平面形は楕円形を呈し、段をもっているが性格は不明である。

遺物は甕片が積み重なって出土しており、その北側には粘土が面状に広がる。本址覆土中上層～下層にかけて黒色処理が施された土師器杯が出土している。

本址の時期は古墳時代後期と推定される。

竪穴状遺構1（第5図）調査区北西端に位置する。他遺構との切り合い関係はない。調査区一面に広がる礫層からの落ち込みとして検出された。壁面の土層観察から水田基盤土下の溶脱層直下から掘り込まれている。検出規模3.1×0.8m、深さ64cmを測り、長方形または方形を呈すると推測される。北側には段があり、南側に向かって徐々にその段がなくなっていく。遺物は散在的に出土しており、二重口縁壺等が出土している。堆積状況、出土遺物から古墳時代の住居址である可能性が高い。

竪穴状遺構2（第5図）調査区中央やや南西寄りの壁際に位置する。2土に切られる。検出規模3.9×1.3m、深さ59cmを測り、長方形または方形を呈すると推測される。

ピット1は床面で検出、床面よりやや上で、黒褐色土ブロックが確認できた。カマド痕跡の可能性もあるが、被熱痕跡や粘土の堆積等は検出されていない。床面は不定形で、無作為に礫が入る。

遺物は小破片の土師器・黒色土器Aが少量回収できた。

土坑（第8図）総数は23基である。調査区中央には小型のものが散在し、北部の1住付近には方形を呈する土坑が幾つか確認できる。南部の4・5住付近には不整楕円形の1土が1基確認できたのみである。単独の土坑においては時期を推定できるものは少ない。また、直に深く掘り込まれている土坑と浅い凹み状の土坑とに大別できる。調査区中央にある諸土坑からはビニール片等が出土しており、現代の攪乱と考えられる。

第1号溝状遺構 調査区南端に位置する。幾度にもわたる洪水性の押し出しによる覆土で構成されている。古代はカマゴコ形台地状に落ち込む地形だったものが、平安時代に起きた薄川の氾濫により形成されたものと推測される。現地形も段は確認でき、南が低くなっている。本址底面には起伏があり、洪水の押し出し方向は東から西方向と推測される。4・5住の北側覆土及び南側の床面を削りとる。

疎層中から銭貨が6枚出土している。内4点是比较的の遺存状態が良好で、転磨・摩滅の痕跡は少ない。本址上層からは平安時代の遺物が出土している。

第1表 竪穴住居一覧表

住居No	平面形	規模 (cm)				床面積 (㎡)	長軸方位	炉・カド形態 種類・位置	時期	遺構所見		
		長軸	短軸	深さ								
1	隅丸長方形	560	<408>	北 33	南 41	42	27	15.618	EW	石組、北西隅	平安	2軒重板
2	隅丸方形	<442>	<134>	42	48	—	43	7.506	EW	不明	平安	
3	隅丸方形	<420>	<402>	38	60	48	48	3.696	NS	石組、西壁中央	平安	
4	不明	—	—	—	—	—	—	不明	不明	不明	平安	
5	隅丸方形?	—	—	—	—	—	—	不明	不明	不明	古墳	

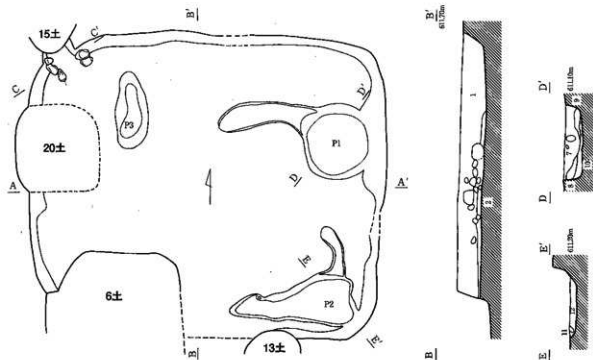
第2表 土坑一覧表

土坑No	平面形	規模 (cm)			新旧関係		時期	備考
		長軸	短軸	深さ	本址より旧	本址より新		
1	不整長方形	<208>	<170>	16				
2	円形	46	37	42			2壜	
3	長方形	112	86	78				
4	円形	42	38	12				
5	円形	80	70	55				
6	方形	238	210	24	1住			
7	円形	108	85	60				
8	円形	70	60	46				
9	—	265	65					未調査、周辺の確とは明らかに異なる種で構成
10	—	150	65					未調査、9土と状況は類似
11	円形	36	36	24				
12	楕円形	180	56	10				
13	円形	102	<92>	66	1住、14土			
14	方形	<52>	52	5		13土		
15	方形	94	81	35	1住			
16	方形	<118>	<46>	<69>				
17	円形	48	36	63	2住			
18	不明	92	<40>	54	2住			
19	不明	<142>	<48>	<44>	2住			
20	方形	<140>	<134>	70	1住			
21	円形	38	24	32				
22	円形	44	<28>	17				
23	円形	152	114	58				

第3表 竪穴状遺構一覧表

竪穴No	平面形	規模 (cm)			新旧関係		時期	備考
		長軸	短軸	深さ	本址より旧	本址より新		
1	不明	<308>	<84>	<64>			古墳	
2	不明	<394>	<130>	<59>			2土	

第1号住居址



A



A' 611.70m

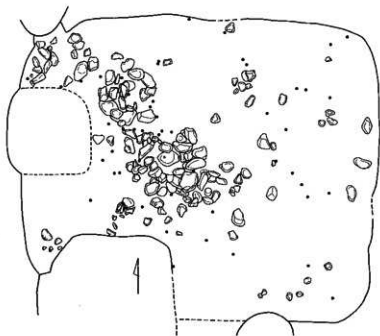
C



C' 611.60m

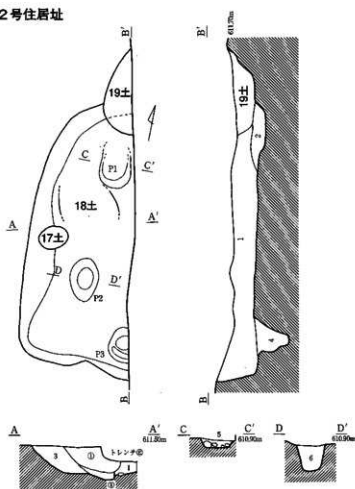
- | | |
|--|---|
| 1: 12.8m×黄褐色砂質土 (IYYS5-4) φ~3cm 磨砕瓦片混入 | 7: 褐色砂質土 (IYYS4-4) 中々秋瓦 |
| 2: 12.8m×黄褐色砂質土 (IYYS5-4) 褐色褐色砂質土 φ~5cm 中々瓦混入。L2より全L | 8: 12.8m×黄褐色砂 (IYYS4-2) φmm以下、7層土混入 |
| 3: 12.8m×黄褐色砂質土 (IYYS5-4) | 9: 12.8m×黄褐色砂 (IYYS4-2) 3層より中々瓦・砂、上層片混入 |
| 4: 褐色砂質土 (IYYS4-4) 中々秋瓦 | 10: 12.8m×黄褐色砂 (IYYS4-4) φ1m以下 |
| 5: 褐色砂質土 (IYYS4-4) | 11: 12.8m×黄褐色砂層 (IYYS5-4) |
| 6: 暗褐色砂質土 (IYYS3-4) φ0.2~1cm 細少瓦片混入 | 12: 褐色砂質土 (IYYS4-4) 中々秋瓦、φ0.2~10cm 磨砕瓦片混入 |

遺物出土状況

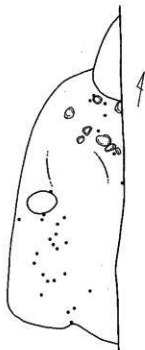


第4図 第1号住居址

第2号住居址

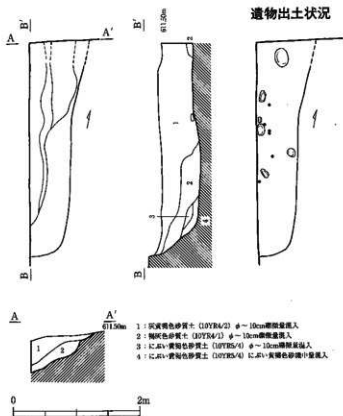


遺物出土状況



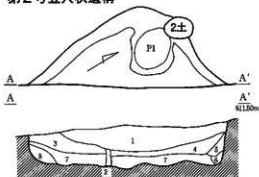
- 17土
 ①: 褐色砂質土 (10YR2/2) 灰・黄褐色土塊小・黄褐色土塊小片遺。φ0.1~5cm燻痕入。
 ②: 灰褐色砂質土 (10YR4/2) 黄褐色土塊小・褐色土塊小燻痕入。
- 2住
 1: 褐色砂質土 (10YR2/2) 灰・黄褐色土塊小・黄褐色土塊小燻痕。φ~10cm燻少燻痕入。
 2: 灰褐色砂質土 (10YR4/2) φ1~5cm燻痕燻痕入。
 3: 褐色砂質土 (10YR4/2) 灰・黄褐色土塊小燻痕。φ1~5cm燻少燻痕入。
 4: 灰褐色砂質土 (10YR4/2) 灰・黄褐色土塊小燻痕。燻痕土塊小燻痕φ=10cm燻痕入。
 5: 褐色砂質土 (10YR3/2) 黄褐色土塊小燻痕。φ5~10cm燻大燻痕入。
 6: 灰褐色砂質土 (10YR4/2) 褐色土塊小・黄褐色土塊小燻痕入。

第1号竪穴状遺構

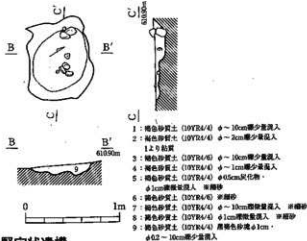


遺物出土状況

第2号竪穴状遺構



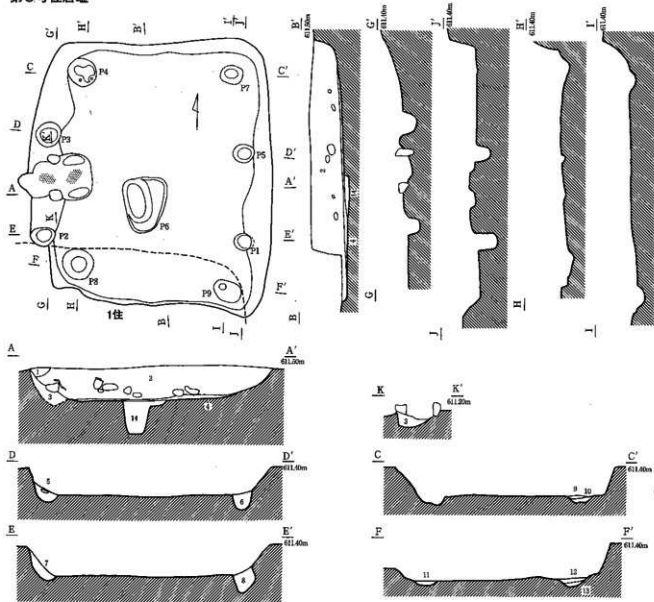
P1 遺物出土状況



- 1: 褐色砂質土 (10YR4/2) φ~10cm燻少燻痕入。
 2: 褐色砂質土 (10YR4/2) φ~2cm燻少燻痕入。
 1.2 土器
 3: 褐色砂質土 (10YR4/2) φ~10cm燻少燻痕入。
 4: 褐色砂質土 (10YR4/2) φ~1cm燻少燻痕入。
 5: 褐色砂質土 (10YR4/2) φ5cm灰化層。φ1cm燻痕燻痕入。燻痕砂。
 6: 褐色砂質土 (10YR4/2) 燻痕砂。
 7: 褐色砂質土 (10YR4/2) φ~10cm燻痕燻痕入。燻痕砂。
 8: 褐色砂質土 (10YR4/2) φ1cm燻痕燻痕入。燻痕砂。
 9: 褐色砂質土 (10YR4/2) 黄褐色砂塊φ1cm。φ0.2~10cm燻少燻痕入。

第5図 第2号住居址・第1・2号竪穴状遺構

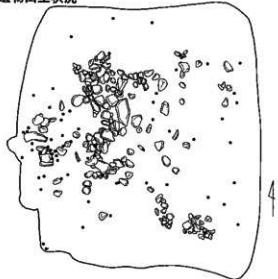
第3号住居



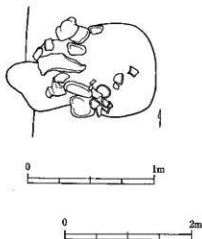
- 1: 黒褐色砂土 (10YR3/2) 赤褐色土塊少量混入
- 2: 暗褐色砂土 (10YR3/3) 磁器、灰褐色土塊中程度土層に多い、φ10~20mm混入
- 3: 暗褐色土 (10YR3/3) φ~5cm膠少量混入、磁器類の多い砂利を含む
- 4: 褐色砂土 (10YR4/6) 暗褐色土塊少量混入、黄褐色土塊少量混入、φ~5cm膠少量混入、※F部膠が膠状に入ら
- 5: 褐色砂土 (10YR4/6) 赤褐色土塊少量φ~5cm中混、φ2~10cm膠少量混入
- 6: 赤褐色砂土 (10YR3/4) 赤褐色土塊少量φ~3cm中混入

- 7: 褐色砂土 (10YR4/6) 赤褐色土塊少量混入、φ2~1cm膠少量混入
- 8: 褐色砂土 (10YR4/6) 赤褐色土塊少量混入、φ2~1cm膠少量混入
- 9: 暗褐色土 (10YR3/3) 暗褐色土塊少量混入、暗褐色土塊小φ~5cm膠少量混入
- 10: 褐色砂土 (10YR4/6) 暗褐色土塊少量混入、φ~3cm膠少量混入
- 11: 褐色砂土 (10YR4/6) 黄褐色土塊少量混入、暗褐色土塊少量混入、暗褐色土塊少量混入
- 12: 褐色砂土 (10YR4/6) 暗褐色土塊少量混入、暗褐色土塊少量混入
- 13: 褐色土 (10YR4/4) 暗褐色土塊少量混入
- 14: 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土塊少量混入

遺物出土状況

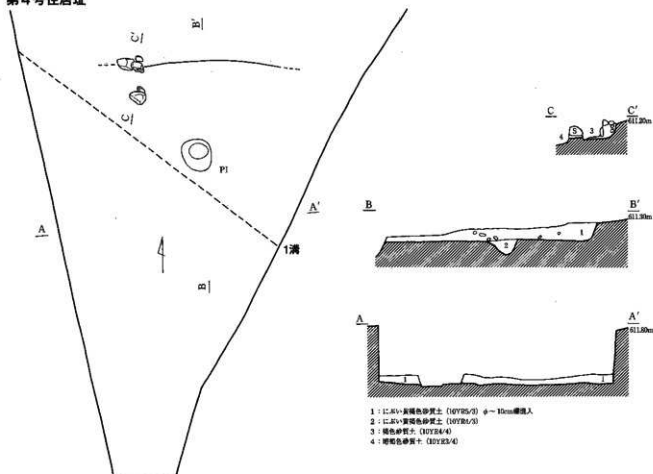


カマド遺物出土状況

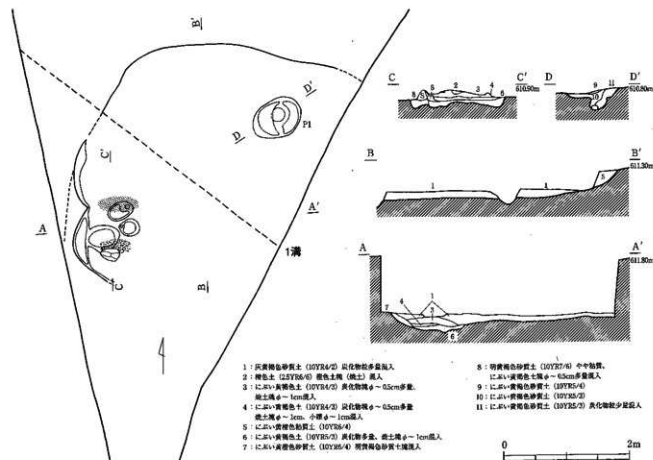


第6図 第3号住居

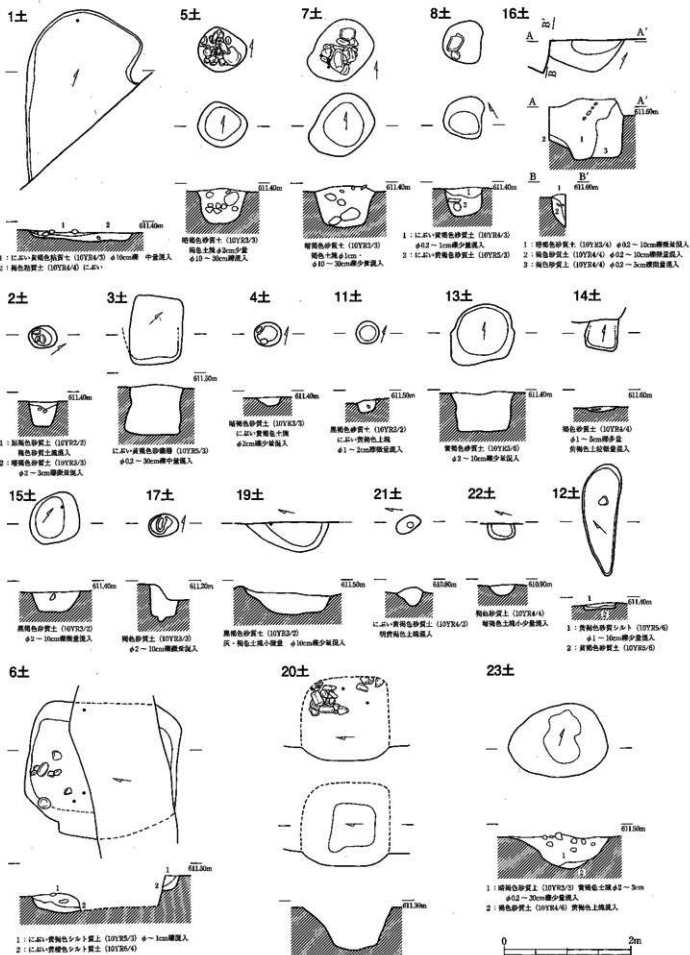
第4号住居址



第5号住居址



第7图 第4・5号住居址



第8圖 土坑

3 遺物

(1) 土器・陶器・土製品 (第9～12図・第4表)

総量で33,084gが出土した。現代のものは混入品として扱い回収していない。遺存状態が良好なもの148点について図化提示した。

イ 縄紋時代の土器

縄紋土器と思われる破片が2点(49・50)、平安時代後期の第1号住居址から出土している。楕円押型文が施紋されており胎土や焼成、器内厚からみて縄紋土器と判断した。ただし、出土地点から勘案して楕円押型文風のタタキを持つ未知の平安時代土器甕の可能性も皆無ではない。

ロ 古墳時代の土器

主に第4号・5号住居址から出土している。しかし、両者は複雑な切り合い関係にあり、第4号住居址は平安時代に属するので、古墳時代の土器はすべて第5号住居址に帰属させて扱った(122～137)。土器の杯、甕、壺、甌、須恵器の高杯の計16点を図示できた。土器の杯(122～130)はいずれも非ロクロ調整で、内面にミガキを行った後、黒色処理が施されている。122のように口縁端部が体部の湾曲からそのまま取まる形態と、123～129の口縁端部が外方へ屈する形態の2種があり、さらに後者には平底気味のもの(124・126・128)と丸底のもの(129)がみられる。内外面とも全面的にミガキが施され、外面底部は手持ちケズリの後にミガキが行われる個体が多い。甕は4個体を図示したが、132は口縁部内外にミガキが行われており、甕の可能性もある。133・134は胴部外面にハケメが見られ、卵球形の胴をもつ甕になると推定する。135は長胴形の甕で、胴部外面には二次焼成による粘土の付着が顕著に認められる。他に堅穴状遺構1からの出土品3点(144～146)が古墳時代に属する。144は内面黒色処理の土器杯底部、145は小形の土器甕、146は二重口縁の土器器壺である。また、第3号住居址出土品のなかに混入しており(109・110)、土器の壺2点を図示している。110は二重口縁の屈曲部、109も二重口縁の口縁部の可能性がある。いずれの土器も6世紀前半の所産と推定する。

ハ 平安時代の土器・陶器

今回の発掘調査の主要遺物である。土器器、黒色土器A・B、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器が認められる。土器の器種器形分類と土器群の年代観は、例言に挙げた文献に準拠した。大別して6・7期の9世紀代と12～14期の11世紀代にまとまる傾向がある。

第1号住居址出土土器・土製品(1～51) 大きく2群に分かれる。第1の群は本址出土土器の主体をなすもので、土器杯AⅡ・杯AⅢ・皿・碗・盤B・小型甕・甕・羽釜、黒色土器A碗、黒色土器B碗、須恵器甕、灰釉陶器碗から成っている(1～43)。小片で図示できないが軟質胎土で濃緑の緑釉陶器が1片片っている。第2の群は黒色土器杯、須恵器杯A・長頸壺から成る(44～48)。第1の群は組成と土器杯AがⅡとⅢに寸法が分化しており、小形の杯AⅡの口径が9～10cmにあることから12期から13期に相当すると考える。一方、第2の群は須恵器の杯Aを伴うことなどから6期を前後する時期と考える。これらのことは、遺構の所見で、住居址内にカマドらしきものが検出されており、2軒の住居址が入れ子状に重複していた可能性と一致する。51は黒色土器碗の底部破片に1孔を穿けた、おそらく紡錘車への転用品と考える。

第2号住居址出土土器(52～73) 黒色土器杯・碗・皿、土器器小型甕・円筒形土器、須恵器杯A・杯B・甕・壺・四耳壺、軟質須恵器杯で構成される(52～62・64～73)。63の灰釉陶器皿は混入品である可能性が高い。軟質須恵器を伴う土器種別組成からみて、7期を中心とした時期の所産と推定する。

第3号住居址出土土器(74～110) 黒色土器杯・碗・皿、土器器壺・小型甕、須恵器杯A・杯B・蓋・甕で構成される(74～108)。109・110の土器器壺片は古墳時代のもので混入品である。82・83の体部外面には墨書があり、82は「原」と読める。食膳具の主体が黒色土器A杯で構成されており、須恵器杯A・杯B・蓋を伴っている点からみて6～7期を中心とした時期の所産と推定する。

第4号住居址出土土器(111～121) 土器器杯AⅡ・杯AⅢ・盤BⅠ・盤BⅡ、黒色土器A碗、灰釉陶器碗から

なる土器群で、本址は第5号住居址（古墳時代後期）と重複していたが、時期が明らかに異なっているため抽出できた。土師器杯AがⅡとⅢに寸法が分化しており、杯AⅡの器高が2cm前後にまとまっているため、14期を中心とした時期の所産と推定する。

その他出土土器（138～143・147・148） 6・18～20土、サブトレンチ2（ST2：調査区南端部壁際に設定したトレンチ。4・5住、2壘、1土等がかかる）及び検出面からの出土品が図化提示できている。6土出土品（138・139）は土師器杯AⅡと壘Aの破片で、杯Aの口径から12期から13期に相当すると考える。18・19土の出土品（140・141）は黒色土器A杯が1点ずつで、6期から8期の間で時期は捉えられると考える。20土出土品（142・143）は黒色土器A碗と土師器壘Bで、11期から13期の間で時期は捉えられると考える。ST2は須恵器杯A（147）、検出面は灰釉陶器碗（148）があり、それぞれの時期は5期から7期、11期から13期の間と押えておきたい。

(2) 金属器（第12図・第5表）

今回、回収できた資料は紡錘車、釘状鉄製品、滓、銭貨、不明鉄製品の全5種11点を数える。うち遺存状態の良好な銭貨4点について図示した。以下、種別に特徴を記載する。

紡錘車 上面観は円形を呈し、側面観はコマ状を呈する。円盤部の厚みは3.7mm、芯部の径は5.5mmを測る。芯は根元で欠損しているため本来の長さは不明である。円盤部の欠損が著しく図示することはできなかった。

釘状鉄製品 長・径から釘と推測されるが、頭の部分が欠落しているため断定することができない。

不明鉄製品 錆膨れの激しい釘である可能性が高いが、遺存状態が劣悪なため断定することができない。

銭貨 1津から6点出土している。皇宋通宝（1）、祥符通宝（2）、開元通宝（3）、紹聖元宝（4）、咸平元宝の5種と不明1枚で構成される。

(3) 石器（第12図・第6表）

四石1点が出土した。1は、安山岩扁平円礫を素材とする。一面中央部に敲打痕跡のある径約50mm、深さ約15mmの凹みが観察される。他の面にも敲打痕跡が観察されるが人為か自然かかは判断できない。凹みの縁は他の面比べ器面が滑らかである。

第4表 土器・陶器・土製品一覧表

No.	地点	種類	器種	寸法				残存度	形状・調整等		実測番号	注記
				口径	底径	器高	口縁		底縁	外面		
1	住	土師器	杯AⅡ	10.1	5.1	2.45	1/12	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住2	1住026
2	住	土師器	杯AⅡ	8.95	3.7	2.7	1/6	3/4	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住11	1住083・TE006・検005
3	住	土師器	杯AⅡ	9.9	4.3	2.75	3/4	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住5	1住073
4	住	土師器	杯AⅡ	10.75	4.3	2.9	完	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住1	1住034
5	住	土師器	杯AⅡ	9.1	5.0	2.7	1/2	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住3	1住005
6	住	土師器	杯AⅡ	9.8	5.3	2.8	一部	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住7	1住013
7	住	土師器	杯AⅡ	9.6	5.2	2.75	1/3	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住6	1住033-059-077
8	住	土師器	杯AⅡ	9.9	4.2	2.7	1/4	1/3	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住12	1住061-073
9	住	土師器	杯AⅡ	9.2			1/5		ロクロナデ	ロクロナデ	1住13	1住073
10	住	土師器	杯AⅡ	10.5	4.6	3.6	1/8	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住4	1住066-073
11	住	土師器	杯AⅡ	11.9	5	3.45	1/3	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住8	1住032・土6-021
12	住	土師器	杯AⅡ	12.1	4.4	3.8	完	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住10	1住050
13	住	土師器	杯AⅡ	12.9	5.7	3.7	3/4	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住9	1住035-051-071-074-壘011
14	住	土師器	杯AⅡ		5.7			完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住14	1住019
15	住	土師器	杯AⅡ		4.2			完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住16	1住075
16	住	土師器	杯AⅡ		4.8		1/3	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住18	1住048
17	住	土師器	杯AⅡ		4.6			完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住15	1住070
18	住	土師器	杯AⅡ		4.2			完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住17	1住055
19	住	土師器	壘	10.3	4.4	2	1/4	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1住26	1住037
20	住	土師器	碗	12	6.3	5.15	1/6	完	ロクロナデ、付け高台	ロクロナデ	1住25	1住012
21	住	土師器	碗					完	ロクロナデ、付け高台、回転糸切	ロクロナデ	1住24	1住032
22	住	黒色A	碗	14	6.4	5.5	1/3	1/3	ロクロナデ、付け高台、回転糸切	ミガキのち黒色処理	1住27	1住016-019-063-072-074-075
23	住	黒色A	碗	15.8				3/8	ロクロナデ、付け高台、回転糸切	黒色処理	1住29	1住024-073
24	住	黒色A	碗		7			完	ロクロナデ、付け高台、回転糸切	ミガキのち黒色処理、見込部に菊文	1住30	1住027
25	住	黒色A	碗		6.8			3/4	ロクロナデ、付け高台、回転糸切	ミガキのち黒色処理	1住28	1住073-075-076
26	住	黒色B	碗		5.4			3/4	ロクロナデ、付け高台	ミガキのち黒色処理	1住31	1住030
27	住	灰釉	碗	14.55	7.6	6.2	一部	完	ロクロナデ、底面回転ケズ)、付け高台	ロクロナデ	1住44	1住002-051・土20-023
28	住	灰釉	碗	15.8			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ、口縁内面沈澱	1住46	1住063-083
29	住	灰釉	碗	13			1/3		ロクロナデ、体部下回転ケズ)	ロクロナデ	1住45	1住017
30	住	灰釉	碗	13			1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	1住47	1住078

No	地点	種類	器種	寸法			残存度		形状・調整等		実測番号	注記
				口径	底径	器高	口径	底径	外面	内面		
101	3住	土師器	小型甕						カキメ	ロクロナデ	3E9	3住007-掛01
102	3住	土師器	小型甕						カキメ	ロクロナデ	3E7	3住011-1住087
103	3住	土師器	小型甕	10.4			1/4		ヨコナデ、カキメ	カキメ、ロクロナデ	3E6	3住076
104	3住	土師器	小型甕		7.8		1/6		カキメ、回転糸切	ロクロナデ	3E12	3住012
105	3住	土師器	小型甕		6.4		1/2		カキメ、回転糸切	ロクロナデ	3E13	3住026-077
106	3住	土師器	小型甕		6		完		カキメ、回転糸切	ロクロナデ	3E11	3住004-079-1住077
107	3住	土師器	小型甕		6		一部		カキメ、回転糸切	ロクロナデ	3E10	3住040
108	3住	須恵器	甕		11.2		1/3		タナキ、手持ケズ	工具ナデ	3E29	3住083-086
109	3住	土師器	甕	12.8			1/12		横ミガキ (古墳中期)	横ミガキ	3E36	3住076
110	3住	土師器	甕						ミガキ磨滅 (古墳中期)	横ミガキ	3E37	3住076
111	4住	土師器	杯AⅡ	12.8	5.4	3.8	1/4	1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	4E7	4住037-040-049-5住003
112	4住	土師器	杯AⅡ	12.4					ロクロナデ	ロクロナデ	4E8	4住033-047-048-5住028
113	4住	土師器	杯AⅡ		5.2			1/2	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	4E6	4住002
114	4住	土師器	杯AⅡ	9.8	4.5	2	1/3	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	4E2	4住028
115	4住	土師器	杯AⅡ	9.6	4.15	2.05	1/2	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	4E3	4住003-038
116	4住	土師器	杯AⅡ	10	4.8	1.6	7/8	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	4E4	4住001-042
117	4住	黒色A	甕		7.4			完	ロクロナデ、付け高台、回転糸切	ミガキのち黒色処理	4E1	4住005
118	4住	灰焼	甕	14.2	7.8	6.35	1/4	3/4	ロクロナデ、回転糸切、付高台	ロクロナデ	4E10	4住030-031
119	4住	灰焼	甕		7.45			1/5	ロクロナデ、回転糸切、付高台	ロクロナデ	4E11	4住004
120	4住	土師器	甕BⅡ		6.2			3/4	ロクロナデ、ナデ、付高台	ロクロナデ	4E9	4住008
121	4住	土師器	甕BⅡ	10.7				完	ロクロナデ、回転糸切、付高台	ロクロナデ	4E5	4住006
122	5住	土師器	杯	14			1/5		ヨコナデ、ナデ	ミガキのち黒色処理	5E2	4住046-5住015
123	5住	土師器	杯	12.2			一部		ヨコナデ、ケズリ後ミガキ	ミガキのち黒色処理	5E6	4住020
124	5住	土師器	杯	11.6	8.4	3.75	1/13	1/2	ヨコナデ、ケズリ後ミガキ	ミガキのち黒色処理	5E4	4住025-5住031
125	5住	土師器	杯	12			1/13		ヨコナデ、ケズリ後ミガキ	ミガキのち黒色処理	5E7	5住010
126	5住	土師器	杯	13.1	8.25	4.75	2/5	1/2	ヨコナデ、ケズリ後ミガキ	ミガキのち黒色処理	5E9	4住045-046-5住019-021
127	5住	土師器	杯	16.2			1/18		ヨコナデ、ミガキ	ミガキのち黒色処理	5E5	5住022
128	5住	土師器	杯	15.35	8.9	5.25	4/5	完	ヨコナデ、ケズリ後ミガキ	ミガキのち黒色処理	5E10	4住010-013-014-015-017-018-021
129	5住	土師器	杯	12.9		6	1/5	完	ヨコナデ、ケズリ後ミガキ	ミガキのち黒色処理	5E8	4住012
130	5住	土師器	杯	10.3			1/8		ヨコナデ、ケズリ後ミガキ	ミガキのち黒色処理	5E3	4住023-045
131	5住	須恵器	高杯						ロクロナデ	ロクロナデ	5E1	4住050
132	5住	土師器	甕	16.5			1/19		横ミガキ	横ミガキ	5E12	4住041
133	5住	土師器	甕	16.6			1/2		ヨコナデ、横ハケメ	指繰匠、工具ナデ	5E15	5住005-006-009-013-007
134	5住	土師器	甕	20.4			1/2		口縁横ミガキ、横ハケメ	口縁横ミガキ、刷工器具ナデ	5E13	4住040-5住012-014-016-019-030
135	5住	土師器	甕		7.6			完	工具ナデ、船上付帯	工具ナデ	5E16	5住008
136	5住	土師器	甕				1/4		工具ナデ後ミガキ	工具ナデ後ミガキ	5E11	5住006-009
137	5住	土師器	甕		7.3				工具ナデ後ミガキ	ミガキ	5E14	4住027
138	1-6	土師器	杯AⅡ	9.8	4.9	2.6	1/3	完	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	1-6 2	1-6 200
139	1-6	土師器	甕A						ロクロナデ、ナデ、付高台	ロクロナデ	1-6 1	1-6 003
140	1-18	黒色A	杯	12.9	6.5	2.6	3/4	3/4	ロクロナデ、回転糸切、付高台	ミガキのち黒色処理	1-18 1	1-18 025
141	1-19	黒色A	杯	13.2	6.4	3.7	1/5	完	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	1-19 1	1-19 015
142	1-20	黒色A	甕		6.5		1/2		ロクロナデ、回転糸切、付高台	ミガキのち黒色処理、ミガキは磨文	1-20 2	1-20 024
143	1-20	土師器	甕B		6.6		1/3		ロクロナデ、付高台	ロクロナデ	1-20 1	1-20 019
144	1-2	土師器	杯						ケズリ後ミガキ磨滅	ミガキのち黒色処理	1-2 1	1-2 002-006
145	1-2	土師器	甕	14			1/8		ヨコナデ、工具ナデ	工具ナデ	1-2 1	1-2 005
146	1-2	土師器	甕	17.8			1/2		横ミガキ、二口縁	横ミガキ	1-2 1	1-2 003-004
147	ST2	須恵器	杯A		7.6		1/4		ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	ST2 1	ST2-009
148	灰	灰焼	甕		7.2		1/4		ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	灰 1	灰07

*種類の略称は次のとおり。「黒色A」黒色土器A、「黒色B」黒色土器B、「灰須恵」軟質須恵器、「灰焼」灰焼陶器

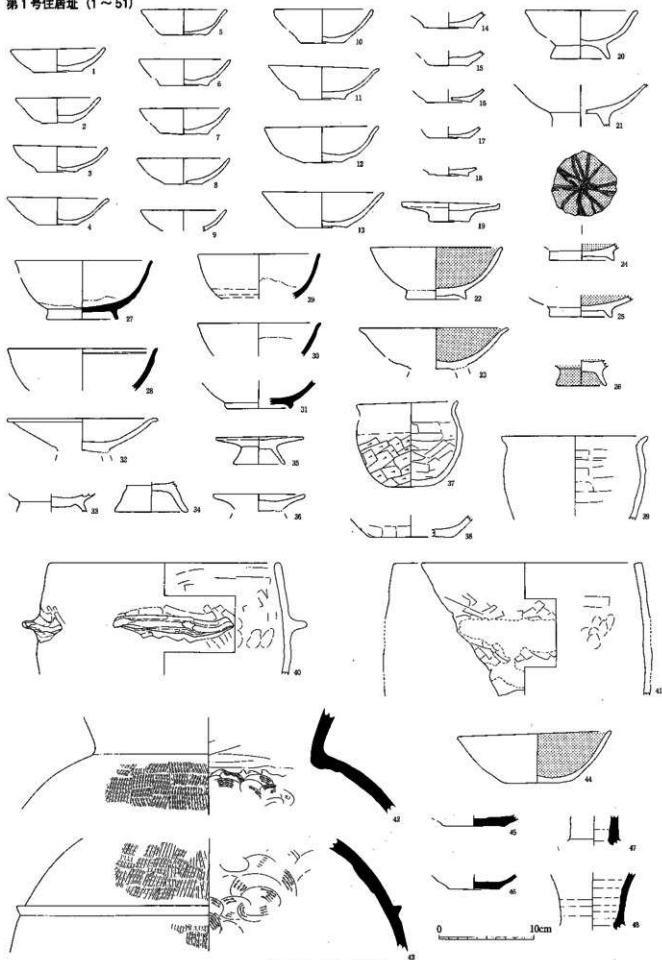
第5表 金属器一覽表

No	図No	出土地点	器種	国名	制作年	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	材質	備考	
1	1住No1	崎津車				43.8	43.5	23.2	15.8	Fe	口縁部厚3.7mm 本部の径5.5mm	
2	1住No40	不明				33.0	13.0	12.2	6.2	Fe		
3	1住No44	釘				29.9	8.2	7.3	2.5	Fe		
4	1住No西	釘				31.9	7.3	6.6	2.1	Fe		
5	4住No5	漆				27.6	27.1	21.1	19.6	Fe		
6	1-1	1-1	皇宋通宝	北宋	1038年	24.5	24.5	1.3	2.3	Cu		
7	1-1	1-1	鏡片			22.5	12.4	1.3	0.4	Cu	線部のみ遺存	
8	2	1-1	1-1	祥符通宝	北宋	1009年	23.6	23.5	1.3	2.4	Cu	
9	3	1-1	1-1	開元通宝	唐	621年	23.8	23.7	0.9	2.0	Cu	背下新月
10	4	1-1	1-1	福聖元宝	北宋	1094年	24.5	24.2	1.1	2.8	Cu	
11		1-1	1-1	咸平元宝	北宋	998年	23.5	20.2	0.9	1.1	Cu	

第6表 石器一覽表

図No	器種	出土地点	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
1	凹石	検出面	安山岩	83	76	26	212.8	定形

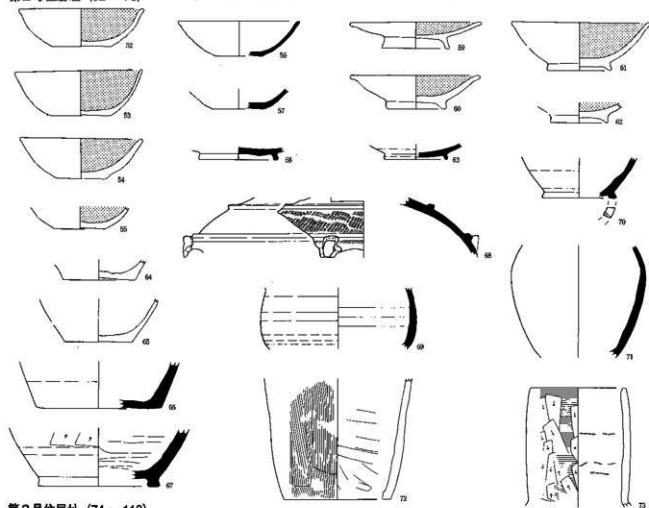
第1号住居址 (1~51)



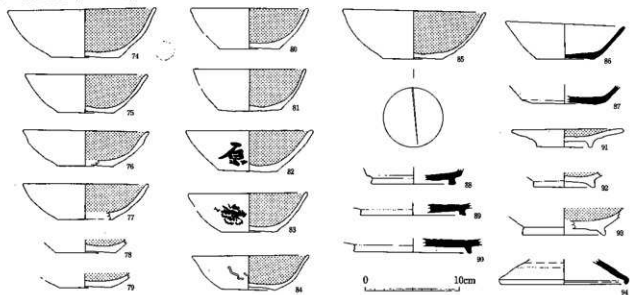
第9图 出土土器(1)



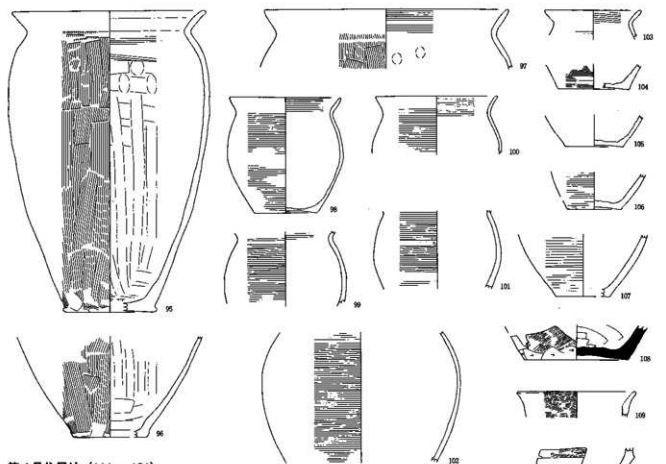
第2号住居址 (52~73)



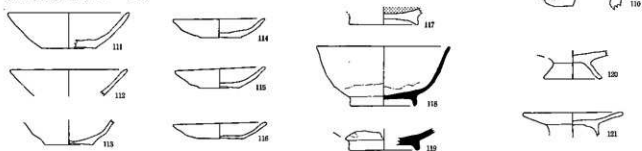
第3号住居址 (74~110)



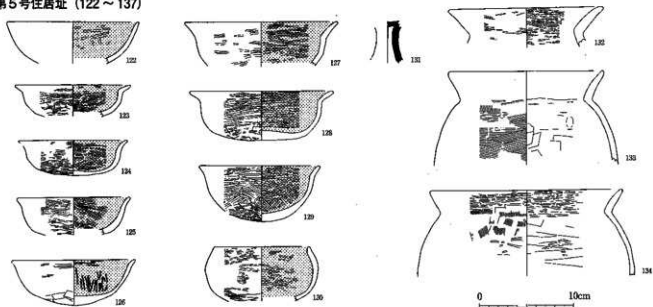
第10图 出土土器(2)



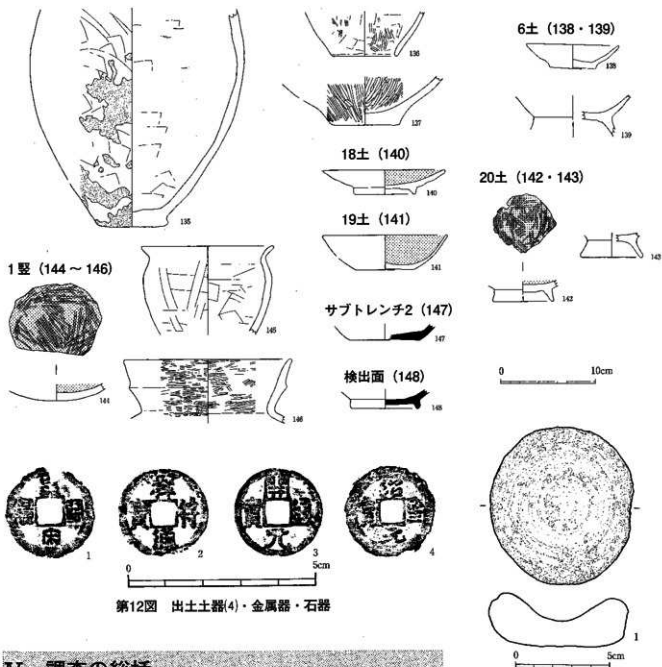
第4号住居址 (111 ~ 121)



第5号住居址 (122 ~ 137)



第11图 出土土器(3)



IV 調査の総括

本遺跡は市道改良工事に伴う新発見の遺跡である。調査対象地は幅約9m、長さ約25m、面積213.48㎡と非常に狭い範囲であるが、古墳時代後期1軒、平安時代4軒の壑穴住居址等が発見され、遺構は比較的密である。調査結果や地形、南東に隣接する畑地から採集されている遺物等から、推定ではあるが東西120m、南北80mの遺跡範囲を定めた。

住居址が洪水性堆積物で構成される溝に床面下まで削平されていたように、非常に薄川の影響を受けやすい立地であるのに、古墳時代後期～平安時代において居住域であった点に注目したい。特に、古墳時代後期の住居址は松本地域では稀な発見である6世紀前半のものであり、近接する山辺～中山地区に築造されている多数の古墳の一部を墓域に持つ集落址の可能性もある。また、調査地から南へ140mに位置する千鹿頭北遺跡は時期が重なっていることから密接な関係にあるものと考えられる。

今回の調査によって、古墳時代後期～平安時代の集落址を新発見することができたが、非常に小規模な第1次調査であること、周辺に多く存在している遺跡の調査例が少ないことなどから、本遺跡の性格は明瞭ではない。遺跡の解明は今後の調査に期待したい。



調査区全景



1住礎出土状況



1住遺物出土状況



1・2・3住完掘状況



3住遺物出土状況



3住カマド付近遺物出土状況



4住遺物出土状況



1住遺物出土状況

長野県松本市 小松下遺跡第1次発掘調査 報告書抄録

ふりがな <small>ながのけんまつもとし こまつしたいせき だい1じはつつちようさほうこくしょ</small>								
書名 長野県松本市 小松下遺跡 第1次発掘調査報告書								
副書名 _____								
巻次 _____								
シリーズ名 松本市文化財調査報告								
シリーズ番号 No203								
編著者名 三村竜一、内田陽一郎、吉井理、直井雅尚								
編集機関 松本市教育委員会								
所在地 〒390-0874 長野県松本市大手3-8-13(5F) TEL0263-34-3000代 (記録・資料保管: 松本市考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)								
発行年月日 2022年3月31日 (平成21年度)								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
こまつした 小松下	<small>ながのけんまつもとし</small> 長野県松本市 <small>つばき</small> 筑摩4丁目 <small>しん</small> 4406番2	20202	516	36度 13分 20秒	138度 59分 42秒	H19.4.9 ～ H19.6.7	213.48㎡	市道3171号 線道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小松下	集落跡	古墳 奈良 平安	竪穴住居址 竪穴状遺構 土坑 溝状遺構	5軒 土師器 2基 (古墳、平安) 23基 黒色土器 1本 須恵器 軟質須恵器 灰胎陶器 緑釉陶器 紡錘車(鉄) 銭貨 凹石		古墳時代後期と平安時代 前・後期の集落址の一部 を調査した。		
要約	小松下遺跡は松本市域東部の薄川扇状地上に位置する。従来は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、試掘の結果、新遺跡として登録された。周囲は薄川の洪水等によって、かなり遺跡が破壊されていると推定される。今回の調査は市道3171号線改良工事に伴う緊急発掘として実施された。発見された遺構の中心は竪穴住居址で、古墳時代後期1軒、平安時代前期2軒、同後期2軒の計5軒が、一部に重複を伴って存在した。古墳時代後期の住居址は西暦6世紀前半のものと推定され、松本市域では稀な発見となった。遺物は古墳時代と平安時代の土器・陶器を中心に多量に出土し、薄川南岸の遺跡の実態を探るうえで好例となった。							

松本市文化財調査報告No203

長野県松本市

小松下遺跡

-第1次発掘調査報告書-

発行日 平成22年3月31日

発行 松本市教育委員会

〒390-0874

長野県松本市大手3-8-13 (5F)

印刷 アサカワ印刷株式会社